

モーツァルト: ディヴェルティメント K.138

16歳のモーツァルトは1772年にザルツブルクでK.136～K.138の3曲のディヴェルティメントを書いた。不思議なことにこれら3曲はどれも3つの楽章しか持たず、メヌエット楽章すらないという、ディヴェルティメントらしからぬ楽曲だった。3曲の最後を飾るK.138は「急／緩／急」の楽章配列と、2つのヴァイオリン、ヴィオラ、バスソ(チェロ)という楽器編成を採用している。第1楽章アレグロは、強弱のコントラストが印象的な第1主題ではじまる明快なソナタ形式。中間のアンダンテ楽章は三部形式で、繊細な美しい旋律を聴かせる。ロンド形式の終楽章プレストはさらに加速して、軽やかに曲を閉じる。

ストラヴィンスキー: バレエ音楽《ミューズを率いるアポロ》

《春の祭典》に代表される「原始主義」の荒々しい音響が炸裂する音楽から離れたイーゴリ・ストラヴィンスキーは、1920年の《プルチネルラ》から1950年ごろまで、バロック時代のイタリアの和声や形式を範とした「新古典主義」の作品を発表していた。バレエ音楽《ミューズを率いるアポロ》も同期の所産で、1928年にクーリッジ財団の委嘱により作曲され、アメリカ議会図書館(ワシントン D.C.)の現代音楽祭で初演された。全音階的な技法による非常に簡素化された形式のなかにも、時折そこから逸脱する和声やジャズの要素などが織り込まれ、流麗で穏やかな雰囲気音楽に仕上がっている。舞台はクラシック・バレエの古典的な装飾性を重視したものだが、これといった筋書きはなく、アポロの誕生(第1場:プロローグ)と、3人のミューズとアポロの出会いとエピローグ(第2場:9曲)を情景的に描いている。

モーツァルト: 交響曲 第39番

モーツァルトは1788年頃、生涯最後の3つの交響曲をわずか数週間で作曲した。演奏目的は不明であるが、質・規模ともに群を抜く3曲をこれほどの短期間で作曲するとは、その創造力たるや恐るべし! 第39番の「変ホ長調」という調性は《魔笛》と同じで、あの奇跡的至純を達成したオペラの雰囲気が、本作にも横溢しており、とりわけモーツァルトが愛したクラリネットの使用が、全体にふくよかさをもたらしている。第1楽章は厳かな序奏から、虹のような旋律とともに晴れやかなアレグロに突入し、対位法的な書法を交えて変化に富んだ展開を見せる。第2楽章は優雅なアンダンテ。続く愉しげなメヌエット楽章の中間部ではクラリネットが素朴な旋律を奏でる。フィナーレは無窮動風のソナタ形式で、たくましく活発に曲が締めくくられる。